

芥川だより

発行日***2015年9月1日 e-mail:akutagawa_dayori@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集発行人 下村嘉明

発行所

☆ 着物から服へ

着物から服を仕立てます

高槻市芥川町2 -1 4 -3

TEL072-681-8870



***** 一部50円です *****

六甲山が病を治してくれた



六甲の山並みを西に望む猪名川の畔に住み着いて30年近くになる。病気になるまでほとんど六甲を意識していなかった。登ろうと思うこともなく無視してきたのである。それが変わったのは、退院後であった。難病の宣告を受けた私は死を覚悟し震え上がった。筋肉が破壊されてゆく多発性・筋炎は、階段が登れなくなり歩行困難になる。

退院後、堤防を歩きながら六甲をみると、宝塚から六甲最高峰にいたる山並みが横たわっている。「もう山に登ることもないだろう。歩くのさえ難儀しているのに」それまで標高が低い為にバカにしてきたが、私には登れぬ高嶺になってしまった。

山好きの友人たちの話を聞きながら、私はこのまま死んでいくなら、もう一度鍛えなおしてやろう！と開き直ったのである。「死ぬか、歩くか」と自分に言い聞かせた。せめて六甲山へは登れるようになりたい。

登るためには筋肉を付けないと登れない。覚悟を決めた私は、歩く距離を倍にして回数も朝夕の2回にした。歩くことを最優先した生活に切り替えたのである。テレビ見る代わりに歩く。本読む代わりに歩く。暇さえあれば歩く。人間の身体は上手く出来ている事に気づいた。運動すると筋肉は確実に付いてくる。友達に同行してもらい六甲に登った。時間はかかったが何とか登れた。それで気を良くして毎週のように六甲に通うようになった。病の完治はないが日常の生活には不便がないまでに回復した。

身近にあるものでも意識して見ないとよくは見えない。私は、病気をしなかつたらこれほど六甲山に登ることもなかっただろう。今、話題の憲法9条も私にとっては六甲山と同じようなものだった。今回の戦争法案の件がなければ、意識することがなかったにちがいない。あたりまえに未来永劫に憲法9条が存在し続けるものと思っていたからである。みんなが本気で守らないと、すぐに戦争立法に書き換えられ平和な国が戦争する国に突然変わる危険性を知った。なにごとにも困難に直面しなければわからない事が多い。

死をめぐるあれやこれ(15)

石川 吾郎

三月堂

秋になると奈良へ行きたくなくなる。それも東大寺の三月堂へ。

思い返せば人生の節目ごとにここにいた。進路を大きく変えた大学生のときに来た。今は亡き母親ときた。妻ときた。子供が生まれたときに来た。その子供を連れてもきた。仕事のいきづまったときにもきた。

この静寂の薄闇の中に、じっと坐している。すると自分が千三百年に余る時の流れのなかにあることを感じる。この歴史のなかで幾百人幾千人の人々が、自分と同じように人生の節目でここに坐したことだろう。私はこれらの人々の一人に連なるのを感じる。

今この時代、この国はあのような為政者を持つてしまったことで、有形無形の大切な部分が確実に毀損されてしまうだろう。それは私を含めたこの国の国民の一人一人に影響を与えないではおかないだろう。

私はこれからのこの国の姿を思い描き、今までは少し違った日常へともどって行く……。



巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム	石川吾郎	1

新自由主義特集2

税金について	伊藤 明	2
虚構の多数派を喰う	坂本一光	5
悪魔のささやき新自由主義	下村嘉明	8
おつちよこチヨイぼけ	A O	9
闘病記	梵店主	10
世界一周旅行記	若山哲郎	10
大人の今昔物語	石川吾郎	11
B級サラリーマン渡世譚	明石幸次郎	12
気持ちいいと感じる曲	C	13
月のななし	大江雄鬼	14
編集後記	嘉	15
女90年の軌跡	眞粧	16
俳句	土田裕	16

§新自由主義特集2

税金について
みんなで知ろう日本の危機(4)

伊藤 明

◆はじめに

二〇一五年九月は、日本の戦後史の中で長く記録される日々になることとされます。まず違憲であることが確定である安保法制が、審議が不十分なまま不当

な手続きによって国会で「成立」させられ、憲法クーデタと言える状況が安倍政権によってこの国に作り出されたという重大・深刻な事態と、それに対して若者をはじめとした国民的な反対運動が盛り上がりを見せているという点で。

参院の特別委員会での採決の不当性(混乱から議事録にも記載されない)により、その成立自体に大いに疑義があり抗議運動もなされています。今後の闘いの焦点はこの安保法制への反対運動の継続と、次の国政選挙で安保法制反対勢力の共闘により、自民・公明など与党を追い落とすことに移っていくことになるでしょう。すでに共産党の志位氏は、同党にとつて初めて選挙共闘による『国民連合政府』の樹立を提案しました。野党が安保法制廃止の一致点をもって共闘し、選挙で票を割ることなく獲得していくことが重要な課題になります。現在の安倍政権は、小選挙区制度のマジックにより有権者の四分の一にも満たない票によって安定多数を獲得してしまっているのです。このことを考えれば、はば広い野党共闘による勝利は十分展望できます。

この安保法制の審議を通して、安倍政権がどれほど言葉を軽んじ言を左右してきたかを、国民はイヤというほど見せつけられました。安倍政権が推し進めるのは「人」を大事にする政治ではなく、グローバル企業を背景とする米国政府と、大企業の利益を代表する経団連の指令や

提言のみを忠実に実行するものであり、大部分の国民を犠牲にして彼らに奉仕させようとする反国民的な本質をもっています。

この事実は今回の国会審議の中で一定明かにされました。山本太郎議員がその質疑で、アーミテージ・ナイ・レポートの存在(前号を参照)を指摘し、安倍政権の政策は完全にその提言(事実上の命令)を実行するものであること、つまり日本の政治は米国に操られていることを明らかにしたのです。

また経団連もまた安保法制を強力に推進し、あげく「武器輸出を国策にせよ」との提言をだしたのです。さらにこの経団連は、ことあるごとに消費税増税を唱えてもいるのです。

◆どぞくさの裏で多くの悪法が

安保法制関連に社会の注目が集まっている間に、国会ではどぞくさまぎれに、今後国民の生活に大きな影響を与えようと思われる重要な法案が次々と成立していることは、マスコミではあまり報道されませんでした。これらは、その一つ一つが国民の生活に直接大きな影響を与える性質のものです。

農協法改悪

これは農協を解体して株式会社化をするというものです。これも米国巨大資本の要求そのままの立法で、外資規制を撤廃し、投資規制の緩和をするというもので、日

本の食料供給ひいては食料安全保障を危機に陥れる可能性の高いものです。

盗聴法の改悪

これは憲法で保障された「通信の秘密」、プライバシーの権利を侵す違憲の法律である盗聴法の範囲をさらに大幅に拡大する悪法です。

マイナンバー制度

これは比較的よく報道されていますが、プライバシーを保障した憲法に違反する可能性の高いもの。日本年金機構の情報漏えい問題にみるように、政府の情報管理に対して国民の多くが不安を抱えています。しかも管理される情報は年金番号ばかりでなく(それはそれで大変なのですが)、驚くことに以下のような詳細なプライバシーに及ぶのです。

- ・住所・氏名・年齢・顔写真・電話・クレジット・購買履歴・健康保険・銀行預金・電気水道ガス・給与・各種税金・納税履歴・年金履歴・資格取得・持病・医療情報・ワクチン接種・産休・育休・図書館履歴といった項目。

政府がこれだけの個人のプライバシーを把握しそれを自由に悪用できるとなれば、戦前日本以上の究極の独裁恐怖政治が行われることにつながります。ジョージ・オーウェルが描いた反ユートピア小説『一九八四年』の世界が実現してしまうでしょう。さらにこんなものが漏洩した場合、どんなに被害が拡大するかわか

ったものではありません。現在の政府にこんな情報管理が可能であるとは考えられません。

派遣法改悪

国民の実質賃金を切り下げて、貧困化に押しやる雇用規制緩和である改正労働者派遣法も成立させられました。同じ職場で三年という制限があった派遣雇用の制限が撤廃されることになります。これまでも派遣大国であった日本は世界一の派遣王国になります。実際派遣会社の事業所数ではすでに世界一なのです。

また安倍政権は 同 労働、同 賃金

を推進するとしています。これには大きな落とし穴があるのです。マスコミは派遣社員にも「正社員なみ」の賃金を実現するといったのんきなことが言っていますが、実態は逆で「正社員の給料を派遣労働者なみに低く抑えることを意味しています。このため正社員であっても賃金は抑えられ貧困へと転落に向かうことになるのです。

さらに政府は労働基準法の改悪をめざしています。「**残業代ゼロ法案**」と言われるもので、まずは高所得者の労働時間規制を外して、残業代を払わなくて済むよう法を改悪し、それを拡大してゆき正社員そのものを実質なくしていく。また労働者保護の基本法である労働基準法を実質的に骨抜きにしてしまうものです。かつて「正規社員こそが日本に残された最後の既得権益」だと竹中平蔵が言ったと

いいですが、**正社員をすべて派遣社員にしようというのが政府 経団連のもくろみ**なのです。経団連の会長は「労働時間に縛られず、成果で評価される制度だ。将来は業種を広げる方向で検討してほしい」と述べています。まさに、安倍政権の労働規制緩和は、財界の望み通りの方向で進んでいるわけです。

TPP

幾度もTPP交渉が不調におわりながら、それでもあきらめないでしつこく米
国政府と日本政府はTPPを追求しています。このTPPの違憲性、すなわち「SD条項による日本の自己決定権を制限されることになってしまふ、など決して許してはならない内容です。(これについては、本紙一〇二号TPP特集をお読みください)」

今回は以下で、主に消費税について取り上げてみます。

◆消費税の意味すること

・アベノミクスは破綻

アベノミクスによって家計支出は史上最低に落ち込み、貧富の格差は拡大し、二十歳代の半数が貯蓄ゼロとなり、二〇一四年度GDPがマイナスであることが明らかになっていきます。ニューヨークタイムス紙も安倍政権が若い世代の雇用を劣化させたことで、未婚の成人の約四〇％は貯蓄ゼロになり、家族を持つ世帯でも三〇％が貯蓄ゼロで、それぞれ一〇年前

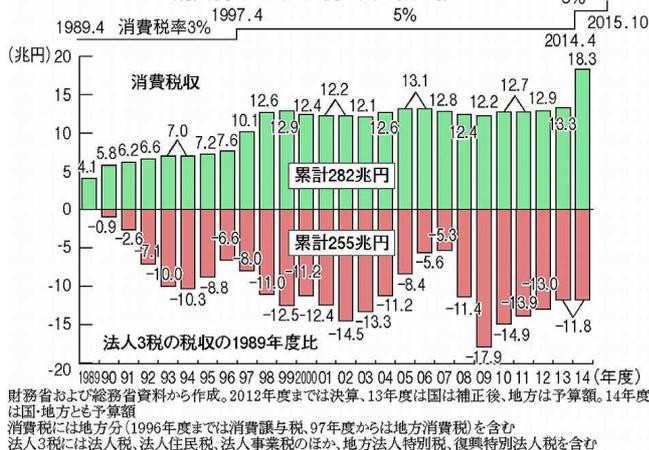
から約一〇ポイント低下して、日本全体の貯蓄率が初めてマイナス一・三％まで低下したことを指摘して、**安倍政権が貯金箱を壊す**と報道しています。

安倍首相が「経済の好循環」というのは、大企業役員や富裕層の儲けが増えていくという意味であり、安倍首相が「回復基調」というのは、大企業役員や富裕層の儲けが回復(回復どころか史上最高ですが)しているという意味です。そして客観的な経済データを見ても、家計は史上最悪に落ち込み、日本経済はマイナス成長になっているのですから、アベノミクスの失敗は明らかです。そしてこの上に**消費税の増税が正気の沙汰でないこと**も明白です。にもかかわらず消費税の一〇％への増税が既定のもののようにマスコミは語り、マイナンバー制度とからめた姑息な「エセ軽減制度」さえ出ているしまつなのです。

消費税は何のため?
消費税についてはその当初から、法人税減税とほとんど同じタイミングで実施されてきています。このことからわかるように、消費税の初期に盛んに喧伝されてきた「消費税は社会保障が目的なのだ」というのは真つ赤なウソなのです。下の図を見てください。(図を参照)

このグラフで明らかのように、法人税の減税額と消費税の額はほぼ同じレベルになっています。つまりどんなに政府がいわけをしても、よく言われるように「お

消費税込と法人3税の減収額の推移



カネには色がついていない」ということを考えれば実は、**消費税は法人税減税によって減った政府収入の補填にあてられていることは明らか**なのです。
消費税が創設された一九八九年には法人税率は約四二％ばかりだったのが消費税五％に増税されたからは、法人税率は三〇％ばかりまで減税されています。そして政府はさらに二〇％台まで減税しようとしています。
そもそも課税制度というのは、それが所得を再分配する働きを持っています。従来金持ちから多くの税をとるといふ累進課税制度がとられてきましたが、近年自民党政権は、この累進課税制度を破壊し、富裕層に減税を行ってきました。つまり金持ちに優しく、庶民からお金を

搾り取る政策なのです。消費税はこの典型で、所得の低い者に負担を多く強いいる税なのです。言い換えると、庶民は資産家の減税。法人税減税分を補うために消費税を払っているということになります。

ましてや増税分が社会保障費に使わるといふことではないのです。この政府は、明らかに庶民の乏しい生活費からかすめつた消費税を企業優遇に使い続けているのです。(しかしこれらのことは残念ながら一般にはあまり知られていません。マスコミもこういった事実について報道しようとはしません。この現実を国民がもつと広く知る必要があります。)

そしてさらに、税金に関する信じられないような事実が存在しています。前号のこの記事でトヨタ自動車の豊田章男社長の驚くべき発言を紹介しました。世界有数規模の企業であるトヨタ自動車が二〇〇八年から五年間法人税を払っていないことが「一番うれいしいのは納税できること。自分が社長になってから国内では税金を払っていなかった。企業は税金を払って社会貢献するのが存続の一番の使命」と。この豊田社長の発言の後半はしごく全うな内容で国民としてそうあるべきであるのですが、トヨタ自動車ほどの巨大企業が合法的に税金を払わなくてよいということが極めて異常な事態で、われわれ一般国民の常識では信じられないものなのです。我々庶民が日々の消費税のせいで必要なものも買えず、節約に

節約を重ねているというのに、世界一位を競う我が国の代表的な企業であるトヨタ自動車が、税金を払わなくてすむという仕組みが、どうして可能になるのだろうか！素朴で強い疑問が渦巻きます。

・消費税増税を主張するのは「経団連」

さらに消費税増税を政府に提言し続けている団体が存在しています。それが「経団連」なのです。ちよつと考えるとなぜ経団連が消費税増税をしたがるのか不思議です。というのは、消費税増税で消費が落ち込み、世の中がデフレになり物が売れなくなれば、大企業の集まりである経団連も困るのではないのか。法人税減税を政府に要求するのは、理屈の上では理解可能ではありません。しかし消費税増税を求めるのは常識的には理解が困難です。ところが実際経団連は消費税増税を唱え続けている。これはなぜなのでしょう。

この裏には驚くべきカラクリが存在しているのです。それについてマスコミは全く触れようとしません。まさにタブーとなっているのです。

・輸出戻し税」というカラクリ

この疑問に対する一つの有力な答えが、輸出企業に対する「輸出戻し税」という優遇制度が存在することです。これは企業が諸外国に商品を輸出するたびに、消費税分が戻ってくる制度です。例えば一〇〇万円の商品を輸出すると消費税分(消費税八%の現在では八万円)が国か

ら企業へ払い戻しされるという驚くべき制度なのです。

商品を輸出する大企業はその大部分を下請け会社に発注しています。下請け会社は親会社から注文がなくなるのを恐れるので、親会社に消費税をほとんど請求することができないのが実情です。消費税分の支払いをカットされても下請け企業は親会社には逆らえない。大企業と下請け企業では力関係は明らかで、下手な事を言えば今後の取引を打ち切られることになりました。下請け会社は企業努力で何とか凌いでいるのが現状なのです。

これは最終製品を作る大企業が部品を作る下請け企業から利益を吸い上げる仕組みなのです。言い換えれば大企業は消費税が上がるとう関係なく自由に仕入れができます。なぜなら仕入れ値の消費税は下請け会社がほとんど負うことになるのですから。大企業は商品を国内で販売するときには、自らはほとんど払っていない消費税を消費者に請求できます。さらに輸出する時にほとんど払っていない消費税分が国から「輸出戻し税」という奇妙な名目で支払われているのです。輸出企業にとって濡れ手で粟の状態なのです。輸出大企業を所管に抱える税務署は、この輸出戻し税によって常に赤字になっているのが現実なのです。

先ほどの疑問、つまり経団連がなぜそれほど消費税増税を政府に迫るのか？という疑問の答えがまさにこれなのです。

つまり消費税の増税は、輸出大企業にとつては「輸出戻し税」の増額を意味しており、まさに大歓迎、丸儲けなのです。

そしてこの「輸出戻し税」の規模は発表されていないので詳細は不明ですが、消費税の総額の四分の一近くこのぼると言われています。(トヨタ自動車一社で二八〇億円以上の巨額な還付を受けているという試算があります。トヨタ自動車

が莫大な利益を上げ続けている理由の一つがここにあります) このような大企業に対する究極的な優遇策が存在しているとは、まったく驚愕です。消費税はただ単に、一般庶民(九九%)に相対的に重い負担を強いて、富裕層(1%)に軽いという意味で格差を拡大させるだけでなく、「輸出戻し税」という輸出大企業優遇策と、法人税減税によって、消費税の総額と同程度の金が、主に大企業の懐に入ってしまう構造になっているのです。先ほどの図のように、消費税の総額と法人税減税額はほぼ同規模でしたが、これに「輸出戻し税」の総額を加えると、明らかに消費税総額を超えることになる。つまり私たちが日々買い物で支払っている消費税は、ほぼすべて大企業に吸収されてしまっていることなのです。消費税が社会保障のために使うことなどは全くできないばかりか、大企業に庶民が貢いでいる構図になっているのです。消費税はまさに格差を拡大する悪税で

あり、ここに述べたような不条理を解消するために、消費税を撤廃して、まっとうな累進課税と法人税により、国の収入を確保するのが正しいあり方だと考えられます。さらに「輸出戻し税」のようなカラクリの存在が、世間に知らされていないことが重大な問題なのです。ただ、この制度は表面的にはその違法性を指摘するのが困難であるようなので、よけいに始末に悪いのです。

◆経団連

国策としての武器輸出を要求

経団連は、安保法制が国会で不当に成立したのとほとんど同時のタイミングで、**武器輸出を国策とせよ」と政府に提言**をしたのでした。まさにこれが、この法制を推進する理由なのだと言わざるを得ないものでした。つまり日本が軍事国家に突き進めば、経団連の大きな勢力である軍需産業の各社が大もうけできるわけです。その提言の中心は「軍事予算の増額」と「武器輸出三原則の緩和」であり、安倍政権はその提言を忠実に実行しつつあるのです。またさらに、これらの**軍需産業には防衛省、自衛隊からの多数の天下りがある**といえます。安倍政権を突き動かしているのは、米国の巨大企業の利益を実現しようとする勢力（ジャパン・ハンドラーと呼ばれる）とともに、経団連なのです。

批判に対する妨害

消費税、とりわけこの「輸出戻し税」についての批判がでるとネット上で必ず

と書いていいほど、反論や罵倒の言葉を書いてくる者が存在しています。単に口汚い罵倒の言葉を書き込む者もありますが、場合によっては慇懃無礼に「輸出戻し税」の正当性をしつこいまでに丁寧な懇々と説いてくる場合もあります。私もこの「輸出戻し税」について初めて知って、ツイッターで批判をつぶやいたところ、ご丁寧にごのような輩がつぶやき返してきました。他の人から指摘によるとこれはかなり有名なことで、常時ネット上を監視していて、「輸出戻し税」の話題が出るとその正当性を主張する書き込みをする者を職業とする者がいるらしいのです。そして巧妙に国民の目からこの「戻し税」の存在を隠そうとしているようなのです。マスコミではこの話題についてはタブーとなっているようで、取り上げることをしません。

◆マスコミと消費税

マスコミが消費税についての報道に及び腰であることは容易に想像がつかます。消費税について批判をして、スポンサーを失うとマスコミも商売ができなくなるというわけですから。ですから今回テーマにした「輸出戻し税」について大手新聞やテレビ番組がまともに取り上げることはまずないだろうと想像できます。これはスポンサーが何よりも大事な存在であるマスコミの構造的な限界・アキレス腱とも言えるところでしょう。スポンサーが国民であるはずのNHKは政府寄りの報道が目立ち、これも報道しません。さらに消費税に関して、日本新聞協会

は新聞に対して軽減税率の適用を求めていることも申し添えておきます。

◆おわりに

このように安倍自民党政権は、九九%の弱者たる国民から徹底的に搾り取り、1%の大金持ちをさらに富ます政策と、この国の富を主に米国の巨大企業にかすめとらせるような政策を推進し続けています。それはこの政権が彼らの利益を代表しているからに他なりません。安倍政権のこのような体制は、周到な準備の上になり立っていることは考える必要があります。小選挙区制度の比較的少数の得票で国会の過半数を支配できる特性を狡猾に利用していることは第一に挙げるべきことです。その上にさまざまな法律の隙間をぬって巧妙に自らの意図を実現させるような人事を配置していることです。これは失敗しつつある「アベノミクス」の方向を強引に推進する日銀総裁、また今回の戦争法案を成立させる原因の一つとなった内閣法制局長官、さらには最高裁の人事にも当然影響を与えていると思われまます。さらには問題発言で悪名高いNHKの会長の人事もわかりです。それに加え、**安倍氏が繰り返し返す民放各社の首脳との会食**など。このような周到で狡猾な準備を行って今日の状況をつくりだしていると思われのです。

それでも皆さんはこのまま消費税を払い続けたいと思われませんか？そして消費税増税を受け入れられますか？それとも・・・

素老人☆よもだ帳 (19)
虚構の多数派を喰う

未来は国民の多数派にある

坂本 一光

「たった一人の民も彼には天地であり宇宙だった」、BS-TBSで放送中の韓国ドラマ『大王世宗』(李氏朝鮮第四代国王)冒頭の字幕にある言葉である。この言葉をこの国の総理に聞かせたいものだと思ったが、彼はついに戦争法案を強行採決し成立させた(安保関連法案等の呼称はほとんど戦争と平和と等しいと思えるので戦争法案と呼ぶ)。曰く「平和と安全法制整備法」、曰く「国際平和支援法」である。立憲主義、民主主義を踏みにじり、平和主義を破壊する政権の手法は、この国が国民主権の文明国であることを忘れさせるほど乱暴であった。安倍内閣の振る舞いは、反立憲主義、反民主主義、反平和主義に加えて、反知性主義であるとの批判もあった。目を覆うばかりの政治の墮落、劣化の現実が白日のもとにさらけ出された。これが、戦後七〇年の節目の年に、他のどこの国でもない、この国に起きた出来事である。

法案は違憲であること、政府の説明は不十分であること、国会での議決は拙速であること等を世論調査は明確に示し続けた。国会で議論を重ねても国民の理解が進んでいないと認めながら、安倍総理は言った。法律ができれば国民の理解

は進む、と。自衛隊をつくったときもそうだった、祖父である岸信介の内閣が日米安保条約を一九六〇年に改定した時もそうだった、街頭や国会前では大きな声で反対を叫ぶ騒動があったが国民の声なき声に耳を傾けたおかげで日本は冷戦の時代を無事に乗り越え経済も発展したではないか。今後なお一層、政治も経済も同盟国アメリカの意に従うのが我が国と国民の安全安心のために肝要である、と言わなければならない。総理の頭は、アメリカを中心とした軍事同盟の強化こそが世界平和の秩序維持に不可欠であるという抑止力の論理と、その中において（総理の口癖）、日本はなお一層の貢献をしたい、もつともつと貢献できるといふ思いでいっぱいの方である。恐ろしくでくの悪い、百年前の時代感覚の人、誠に時代錯誤の総理ではある。私はときどき、日本の総理が、たとえば国連総会で、「我が国は長年にわたる米国の絆（注）を断ち、米国を含めて世界のすべての国々と友好を深めたい、そのため憲法九条の精神で世界の平和に貢献する決意をここに宣言する」と演説する姿を想像する。そのとき日本は世界史をどのように変えるだろう、と。

（注：こ）でいう絆は、馬・犬・鷹などをつなぎとめる綱という本来の意味から来た、自由を束縛するもの、絆（絆）の意味である。そこから転じて、断ち切れない結びつきの意味もある。国民は権力者の努力や情熱や誠実さ

など、まことしやかな仕草に決して絆（絆）されてはならない。また絆（絆）という言葉の響きに絆（絆）されてもならない。被災地の復興のために国民の皆さんが絆（絆）を固めて前に向かって踏み出すことが何より大切で、と権力者たちは自らの責任を棚に上げて言うことができるからである。因みに、ウィリアム・サマセット・モームの『人間の絆』の原題 Of Human Bondage の Bondage は絆と同様に、束縛、屈従、奴隷の境遇等を意味する言葉である。

しかしそんな総理はいなくて、川柳風に言えば、日本の総理は米国に対し、

戦後レジーム

基地も出します人も出さ

と言っている。それで国民の安全と暮らしが守れる、と。安倍総理を先頭に自由民主党は、戦後レジームからの脱却とか、日本を取り戻すとか、大仰に叫ぶけれども、政治も経済も軍事もアメリカにべつたり従属する戦後レジームの最強の枠組みを死守し、日本を取り戻すどころか国民の命まで売り渡そうとしている。

成長戦略売れるものなら武器原発

それはほとんど

成長戦略

売れるものなら魂も

と同じである。そう、奴らは（誰のことや）悪魔に魂だつて売り渡す輩なのだ。福島原発の事故があつても総理自ら世界に原発売り込みの行脚に出かける国（過

酷事故を経験した国の原発だからもう安心です、なんて何で言えるんやろね）、戦争法が通るとみるや武器輸出の促進を言う経団連の提言などを見ていると、日本の政界・経済界は日本が死の商人国になることを望んでいるのかと唾然とする。戦後七〇年に、戦後の日本が作り上げて来た国の心とかたちを変えさせてしまう訳にはいかない。

前回の繰り返しになるが、戦後十五年の一九六〇年と、戦後七〇年の二〇一五年とは同じ戦後ではない。九月一九日未明、参議院本会議で戦争法が強行採決され成立したとき、国会前で抗議行動をしていた「自由と民主主義のための学生緊急行動」（SEALDs）の若者たちは、

一瞬の間において、「採決撤回、採決撤回」と抗議の連呼を開始した。選挙に行こう、との声も上がった。テレビニュースが報じる映像には挫折感も悲壮感もなかった。そこには、国民とともに作り上げた運動に十分な手応えがあり、闘いはこれからだと未来に希望を見ている若者たちの姿があつた。おれたちの国の国会は何かおかしくないか、民主主義とは何だと世の中に呼びかけると、国民各層男も女も、老いも若きもが毎日に声を上げ街頭に国会前に集結したこの夏の夏の大きな現象は、この国の戦後七〇年がいたずらに無駄に過ぎていかなかったことを当の若者たちだけでなく、国中の無数の人々に確信させた。国会で破廉恥な議論しか

できない政権党の姿と、自らの心で感じ、頭で考え、自分たちの未来は自分たちで決める、勝手に決めるなと声を上げた人たちの姿はまことに対照的であつた。醜悪なものとも美しいものの対比、勝手な言い方が許されるなら、これまでに経験したことがないようなかたちで、『世界は美しい』と国民各層が肌で感じた今夏の経験は、この国の未来を変えるかもしれない、と思う。世界は美しい、権力の理不尽にひるまず、真つ向から対峙する若者たち、年寄りたち、男たち、女たちは輝いていた。

普通に考えると、つまりはどう考えてみても、安倍総理を先頭にした国会の多数派は、政権与党の公明党を入れても、あと三党を加えて一〇党のうち五党が戦争法に賛成したと言つてみても、虚構の多数派に過ぎない。戦争法など堂々と表の公約に出さず、マジックにもならないアベノミクスを喧伝し、消費税増税は延期しますと言つた挙句の先の総選挙で、一強と言われる自民党でさえ有権者の一七％の支持を得たに過ぎなかった。この夏に起きたことは、国会と国民の多数派の逆転であり、

国民の多数派国会包囲する

現象であつた。今後起きることは、安倍総理が期待するように、成立した戦争法への国民的理解の広がりではない。逆に、安倍総理たちは、自らがいかに国民から

かけ離れた存在、要するに裸の王様であったかを知ることになる。虚構の多数派が、これが民主主義であると乱暴に多数決で、決めるべき時には決める政治をする、これは怒り、しかし嘸うしかない政治ではある。

多数決けて正しき保証せず

それは民主主義の常識であるだろう。便宜であるに過ぎないことを、正しさの証明であるかのように言うのは間違いである。それは、「違憲ではない」と百万回言うてみても合憲であることを証明したことはならないのと同じである（改憲論者の憲法学者、小林節先生はいいことを言いますね）。

「違憲」、「違憲」、「違憲」、

戦争法は違憲です

一点の偽りもなく違憲です

それにしても政権党の政治運営のありようには、仮に、安倍総理はこの法律で日本は平和になるのであって戦争になんか絶対にならないと言っているから、もう一度仮に、日本が米国の戦争に巻き込まれ「専守防衛戦争」を始めたとき、先の大戦と同様に、彼らがそれを止めるのは至難のわざであろうと思わざるを得ないものがある。安倍様ご一統は今も自民党という昔の名前で出てはいるけれども、党内手続きを粛々と踏まながらついに古き、ほんの少し良き自民党をぶっ壊し、

紙上シヨプレヒコール！

戦争は平和である アベシンゾウ

— ウソつきは戦争の始まりだ

警戒を ほんまに戦やる気やで

— これまでに見聞きしたことがないような危険な政治家です

安全安心その一言に眠れない

— 政治家が安全という危険です

安全安心また解釈が違います

— 日本語を逆さに上手に読みますね

戦争はノック無用でやって来る

— ずかずかと土足で平和かき乱す

戦争法これで儲ける奴もいる

— 経済活動は平和でなければできやせんよ

福島は運が悪いと再稼働

— わが亡きあとに洪水はきたれ

フクシマの国が原発売りまっか

— 恥を知れ

息子、夫、恋人、父に赤紙寄越すのか

— 赤紙は国禁の紙、刷らせぬぞ

好き嫌い嫌いは好きと解釈で

— 好きは好き、嫌いは嫌いと言ってくれ

軍勢力なければ平和築けぬか

— 九条で世界の平和築こうよ

生きていることに税課消費税

— 生まれたときが悪いのか

道義なき政治家道を説きたがる

— あなたにだけは言われたくない

人生いろいろ政治いろいろ違うでしょ

— ネギ買って団扇配った大臣も

政治家の特技公約破りです

— 大臣のイスで平和を売りました

TPP儲けるために国も売る

— TPP国破れても企業あり

その角右に曲がるな安倍古道

— 安倍古道、政治遺産にしてしまおう

意志のある怒りの水か汚染水

— 食うために働くか働くために食うか派遣の怒り

米国と財界が神アベノミス

— アメリカと金がすべてに沖縄NO

戦後レジーム沖縄だけは死守ですか

— 辺野古埋め戦後レジーム脱却かい

戦争法秘密増税再稼働

— 派遣法司法取引TPP

悪法は天から降るか地に湧くか

— 木っ端みじんに吹き飛ばしたい

ありふれた平和は奇跡七〇年

(かたちは心であり、心はかたちになる
大分の素老人)



下村嘉明

黙っていたら殺される

田舎でも都市部でも暮らしがだんだん苦しくなってきた。この調子でいけば、首が回らなくなる。先日、親しい店主が「最近、お客を見ていて感じることもある。おびえているとか思えない。これから、どうなるんやろかと。生活への不安がみんなをおびえさせている。金も持っていない。一部の金持ちはいるが、それはわずかだ。ほんとうに金がなさそうだ」と嘆く。まだ景気の下さそうな都市部でもそんなのだから、地方の疲弊はもっと深刻だろう。

若者は契約社員でこき使われ残業代もカットされ、生活していくのがやっとだ。とても、結婚して子供を育てる余裕はない。だから少子高齢化はあたり前だ。学資ローンを背負って社会に出て派遣社員になっても、ローン返済に明け暮れる日々が待っているだけで、何のために大行ったか分からない。

ローンをかかえておちおち結婚など出来るわけなど無い。その上、政府は消費税を一〇%に引き上げると言っている。いくら不景気でも上げると豪語する。

派遣法改正で派遣社員を一生続けなければならなくなった。派遣社員は日雇い

みたいなもんだから、安定した生活がでない。いつ解雇されるかわからない。

運よく正社員になっても派遣社員が多数いる職場で正社員だからと仕事を押し付けられ残業が増えるばかりで、実質賃金は下がりっぱなしだ。どちらにしても労働環境は悪くなるばかりだ。

それでも、元気なうちは何とかなる。しかし、何か事あると、もう何とも出来なくなる。事故とか病気とか家族の介護など、必ず起きる事が起きればもうやっていけない。貯金の切り崩しでしのいでもその先がない。

生活保護受給者が年々増え続けるのは当然だ。みんな怠けているわけではない。やっていけないからだ。

いったいこんな社会に未来はあるのか！ はっきり言って「ない」

しかし、大企業の懐は大変うるおっている。儲かっているのだ。おかしいじゃないか。働いている人は皆苦しんでいるのに、大企業はどんどん儲かっている。なんでや？

賃金を減らし大企業減税の特典を受け、輸出の際の消費税の戻し税を受けているからである。

大企業にすれば、労働者が困れば困るほど都合はよい。安い賃金で好きなように使えるからである。文句言えば解雇できる。人を部品のように使えるからである。使われている社員はたまらない。下

請けも泣かされっぱなしだ。

このような状況を国家のスケールでやろうとしているのが、新自由主義である。とにかく徹底的に一部の大企業が金儲けしようとする動きなのである。これをするために困るのが民衆の反対である。団結してこの矛盾だらけのシステムに抗議されたら困るから、大きなワナであるTPPを持ち出し、憲法より上に位置するこの条約で、国民にうんもすんも言わせぬようにしたいのだ。

今、自衛隊派遣法が可決したが、これも大企業の金儲け以外の何ものでもない。マツチポンプみたいなものだ、自分たちで戦争を仕掛けて戦争をやり両者に武器を売り儲ける。戦費は消費税を上げて国民から吸い上げる。これに反対する者がおれば、秘密保護法案で逮捕する。

この法案は逮捕理由も審議内容も一切公表しなくていいから、政府にとっては突然逮捕できる都合がよい法案である。新自由主義の最大のテーマは、大企業のもうけ主義を国の施策に浸透させることである。すべてを儲ける為に作り直し、儲からない事はやらない。政治家に金をばらまき大企業の意のままに動かして国を乗っ取り金を儲けをする。

こんな事をさせていたら、まちがいくみんなが貧乏になり力なく使い捨てられ、反抗する力もなくなり死んでいくだけだ。そうです、奴隷社会になります。

この動きは、いまかなりのスピードで進んでいます。

貧乏になれば、友達やまわりの人々の付き合ひも少なくなり孤立していきまします。自分の想いを伝える術が無くなり、ついついマスコミの言葉を信じてしまします。そうなれば、政権の想うつばです。何がしかのグループに参加しておれば、いろいろな意見を聞く機会もあります。同級会や趣味の会など参加しましょう。(もちろん金があまrikaからない)

もし、アメリカが中東やアフリカで軍事行動を起し自衛隊に派遣要請をすれば、政府はすぐに応じます。そして、自衛隊の隊員が死傷すれば、マスコミはこぞつて敵をたたき、戦争を煽り立てます。もうそうなったら人々の怒りが政府ではなく、敵に向けられ燃え上がります。

そのようになれば「戦争反対！」などと叫べなくなります。非国民扱いされるからです、そうです、悲しいかなすぐに大政翼賛会が作られてしまうでしょう。今なら、まだ「戦争反対！」が言えます。でも、いつ言えなくなるかわかりません。来年の参議院選挙までに何か戦争が起れば、もう選挙どころではありません。今すぐにでも、この流れを止めなければ国民はエライ目にあいます。

子供らに財産を残さずとも戦争のない国を残しましょう。」

安倍総理は死の商人なんやろか?…の巻

安保法案が可決されてしまった。国民の八〇%が「え〜ッ」と言っているのがわかっているのに、勝手に自民党が決めってしまった。こんなの、ありか?と思つてゐるうちに、ニュースの目玉は川島なお美の死去、十五夜、スーパーマン、福山雅治の結婚と移り変わつて、何やら遠いことのようになつていく。

「戦争、反対!」「憲法、守れ!」とデモ隊の先頭で軽やかにステップを踏みながら可愛い声を張り上げていた、きれいな女の子たちはアルバイトで雇われていた、などがっかりするような話も聞いた(週刊誌にでも出ていたのだから)。

日本人の悪い癖で、「まあ、すぐに自衛隊の隊員が死ぬと決まったわけじゃないし」「まあ、世界の中で生きていかなアカンねんから」と「まあ、しゃあないか」と矛を収めてしまう。

忘れるのも早い。えらそうに書いている私も「廃案にするための集会に行かなければ!」と息巻いていたのに、実際には何ひとつ行動していない。

近所のスーパーマーケットの野菜売り場で、バカ高くなつてゐるトマトやレタスをにらみながら、「ほんまに、安倍政権になつてから、ええことは何もない。消費税が八%になつて、もともと五%やつたんやから、値上がりは三%のはずやなのに、何もかも上がつてゐる。無能なう

えに海外でカネをばらまき、自民党独裁の古臭い舵取りしかできない安倍総理のせいで、市民生活の根幹が揺らいでゐるのに、何が「一億総活躍社会」やねん!と毒づくぐらいのことしかできない。

安倍総理の言葉は、いつも軽くて、具体性が欠けていて、しかも腹立たしい。

「一億総活躍社会」の前に言つていた女性を輝く社会。これ、どうなつたんですか? ちょっとでも、一滴でも、安倍総理がこの言葉を唱えてから、女性が輝いたんですか? そもそも、ひとが輝くつて、どういふことなんですか? 政治家はこんなアホっぽい言葉を使つてはいけない、と安倍総理自身は思わないのだからか。それとも、側近か官僚かしら

ないけど、安倍総理を「失脚させたい!」と考へていて、「女性が輝く社会? いい言葉ですわね! 女たちが泣いて喜びますよ! 支持率アップ間違いなし!」などとおだてて、裸の王様みたいにあとで本人が困るように企んでゐるのだからか。言わせていただが、「輝く〇〇」なんて、いまだき、どんな安物のコピーライターでも使わない。ましてや、政治家である。具体的に言え! もちろん、それは言えない。だつて、「女性が輝く社会」といふことだから、「それをいつちやあ、おしめいよ(おしまいよ)」。

ならば、最低限、キレイごとを言うな。「少子化です。このままでは税収が減つて、日本は大変なことになる。元気で働ける女性は仕事をして下さい。仕事

を探しやすい、仕事を続けやすい環境づくりに国をあげて取り組みます。具体的にこういうことをします。就業できた皆さんは、収入の〇%税金を払つて下さい。でも、差し引き、働いた方のトクになります。いただいた税金はムダには使いません」といふのが、まっとうな政治家の言うべきことではないのか?

もつとも、安倍総理がまっとうな人だとは到底、思えないが。福島原発事故のあと、諸外国でヌケヌケと「日本の原子力発電所は世界一安全です」なんぞとスピーチして、「これぞ総理のトップセールス」などと自慢気な顔をしていた。何故、即座にだれかがつっこまないのだから? 「世界一安全やつたら、福島は何であんなことになつたん?」その後の処理はどうなつてんのん?

まさに、死の商人。そして、昨日(十月一日)、飛び込んできたニュース。「防衛装備庁、発足」。自衛隊が持つ武器の開発から購入、民間企業による武器輸出の窓口役までを一元的に担い、約二兆円の予算を握る巨大官庁だ」と。

はあああああああ?

何、これ? 国民、なめてゐるのか?

「戦争、しません」と誓つておいて、武器を売る? 武器を開発する?

しかも、二兆円の予算つて、税金使うわけ? 「大丈夫ですよ、武器売つて四兆円儲けますから」なんてことを言うつもりだつたら、この国は間違いなく、早晚、滅びる。武器をつくつたら、必ず使いたくなるからだ。使わなければ、カネをド

ブに捨てたことになる。

戦争には大義名分なんて本当はなくて、一部に儲ける人がいて(軍)という存在も含めて、あやつられて後で取り返しがつかないことになる、と私たち日本人は骨身にしみて知つてゐるはずなのに。「やらなきや、やられる」と国民に危機感をつのらせた結果、世界最悪の惨事を招いたのに。もちろん、日本だけのせいではない。先方にも儲ける人がいるから、「クソ生意気な日本国め!」と憎たらしげに言いながら、心の底では「毎度あり!」とほくそ笑んだに違いない。

戦争は、武器商人とその仲間たちだけがトクをして、大多数は地獄を見る。私たち、一般人でもそれぐらいのことはわかる世の中に、せつかくなつたのに(八十年前に、こんなことを書いたら、即、憲兵に連れて行かれてヒドイ目に合わされて、しかも国賊扱いされてきた)、時代が逆戻りしたかのような、いまの日本。

カネのためなら、原発を稼働させ、外国にも売り、武器もつくり、自衛隊にも戦争に加担させる。

安倍総理がその指揮を取つてゐるなら、私は安倍総理が総理であつてほしくない。平和の象徴、天皇陛下、ここは出番です。「おやめなさい」と言つて下さい。我らの美智子さま。ぜひ、お力を。それから、世界の平和を愛する皆様。安倍総理の無茶を止めるのに協力して下さい。国民の声には耳を貸しません、諸外国とくに欧米諸国にはからつきし弱腰なん

梵店主

万博公園の木々も紅葉に色づきだす十月の終わり頃、担当医から「そろそろ退院を考えましょうか」と言われた。C P Kの数値が二〇〇位と下がってきて、ステロイドの量も三十五ミリ位になった。退院の目安は、三〇ミリである。三〇ミリになれば感染症の危険が下がるからである。

よっちゃんが入院しているのは、大量のステロイドを飲むことによる免疫力の低下で病気に感染しやすくなるから隔離しているのである。もちろん、薬の副作用に対する適切な処置も大事である。

この病気は、ステロイドの副作用に耐えなければいけない。数年間はガマンしないといけないのだ。いや一生かもしれない。完治することがないのだから、寛解という状態で五ミリくらいを飲み続けるのが最高の状態らしい。病気との闘いというよりステロイド剤との戦いなのである。しかし、この戦いは厳しい。

医師から退院をほめかされたよっちゃんは半信半疑ながらも「退院」という言葉に酔っていた。入院する時には二度と生きて娑婆に出られないだろうと覚悟をしていたからだ。そんな覚悟をとろけさせる言葉が退院であった。えっホント

かいなあ、すぐにでも病状に変化がおきて退院がとおのくのではないかと、疑問いとホンマかもしれないという想いで、よっちゃんの心はゆれていた。

時間がたつにしたがい退院が現実味をおびてくるとよっちゃんの心に変化が起きてきた。まず今まで毎日欠かさず読み続けてきた聖書が真剣に読めなくなった。字面を追いかけても以前のように頭にすーと入ってこなくなった。分厚い聖書ももう少しで読み終えるところまできたのに、頭に入らなくなったのである。

こんなことを人に言っても理解されないだろうが、本に書かれた文が滑っていくだけで、頭に残らなくなったのである。確かにこれまでも十分に理解していたかといえ自信はないが、それなりにおもしろく感じて熱心に読んできたのだ。それが心境の変化で変わってしまった。よっちゃんは、その時に意外なことを考えた。

これまでむずかしいと思ってきた事柄を理解できなかったのは自分の心がジャマをしていたからではないかと。こころを落ち着かせ色々な欲をおさえ無垢なる状態にすれば、もっと素直に理解できたのではないかと想像し始めた。

勉強でも同じでテストを一夜づけでいい点取ろうとにわか勉強ばかりを繰り返してきたから、学問のおもしろさを知ら

ずに来たのだ。テストの点など気にせずゆつくりと勉強すれば、もっと素直に理解できたのではないかと。時間が無いために、肝心なところを飛ばしてテストに出そうな箇所だけを一夜漬けで暗記しテストが終われば、それでおしまい。そんな事をこれまで繰り返してきたから勉強することのおもしろさを知ることが出来なかったのだ。

人の能力の差などは、思うほどにはないのかもしれない。それぞれの個性は違うが、それぞれ人の性格にあわせてゆつくり勉強すれば、早いか遅いかの違いはあっても到達点は同じぐらいになるのである。我々はスピードを気にして何事も合理的にする習性が身に着いた為、に一定の条件下での成果を求める。しかし、その条件とは多くの人を切り捨てるものではないだろうか。知らぬ間に我々は合理主義の迷路に迷い込み悪戦苦闘しているだけではないのか。



モアイが起きたイースター島

若山 哲郎

南米大陸最後の地、ペルーを二月一日に出港。いよいよ遙か日本に向け太平洋横断の旅がスタートしました。順調に航行して六日目、四〇〇〇キロ程航海したところで船は誰でも知る有名なイースター島に接近しました。しかし、有名な割にはモアイ以外この島について何も知りません。否、モアイさえもほとんど詳細は知らないのが現状ではないでしょうか。私もここへ来るまでは知っていました。まずイースター島はチリ領です。そしてイースター島という名称は、一七二二年オランダ人が発見した日がたまたま復活祭だったというだけで、島名は何んの由来ないところからつけられたということ。現地の人にはラパヌイ島という広い大地を意味する名称を使っています。この島はもちろんモアイ像を持つということでも十分独自性があるのですが実はポリネシアトライアングルと言って、北はハワイ、西はニュージーランドと東のここを結ぶ三角が同じ文化圏なのです。言語だけでなく文化、宗教なども共通性が多くあるとか。さて、肝心のモアイです。これはいったい何のために作られたのか。定説はないらしいのですが、しかし私たちが

漠然と思っている、島を守るシンボリックな守り神というのはどうやら間違っているらしいのです。理由はどのモアイも海の方を向いて立っているのではなく、海を背に陸を見て立っているからです。船が島に近づくと遙か遠くにモアイが並んで見えました。望遠鏡で確認するとならばど全部背中しか見えません。それはどうやらお墓と関係があるようなのです。

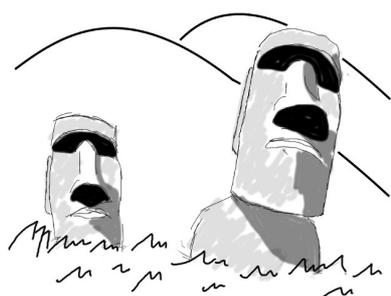
村の権力者のための墓。村を守るために村の方を向いているのです。分かりやすい説明です。納得。しかしこの島もモアイ運搬用の森林伐採と食料資源不足のために部族争いが発生し、さらに十八世紀には西欧人の侵略により原地人は奴隷として南米大陸へ連れて行かれて最少では百人足らずの人口に激減したと言います。ですから事実はいまだに不明です。文字があつたらしいのですが十分解読もされず、現在、島は西欧人の孤島好きのリゾートアイランドとなっております。あと三〇年程すれば完全にラパヌイ文化は消滅しモアイ像だけが残されるでしょう。さらに本国チリはこの文化を保存するという気が全然ありません。ひどい話ですがこの島にはゴミ消却場がありチリ本国のゴミが船で運搬されて処理されています。そりゃ、チリってインカ、アンデスだものポリネシア文化なんて関心なし。日本でのアイヌ民族の扱いとよく似てい

るかもしれません。やっぱりここも来てみなければ分からないことだらけでした。

さて、船はラパヌイ島に接近しました。島は火山岩で出来た土地、大型船が入港出来るような港はありません。よって沖に停泊。小さなボートで分乗し上陸するのです。なにせ千人近くの人を運ばねばならないため二日間もかかりました。島の大きさは北海道の利尻島と同じくらいの面積ですから一日で観光は出来ず。入島料がかかります。環境保全に使うのだそうですが。そしてお約束のモアイのお土産がやはりありました。上陸して私たちのグループは伝統文化交流というよくわからないイベントを経験しました。ネイティブな一家の筈ですがなぜか白人もいるし関係がどうなっているのか。しかしそんな事よりきれいな娘さんが登場したことがよかったです。でも年齢的に少しあぶない感じがしましたが。日本の綾取りにそっくりなのを披露してくれたのには少し驚きました。ポリネシア文化が源流なのでしょう。それから私たちは郷土料理を食べました。これもポリネシア共通ですね。バナナの皮での蒸し焼き。肉は羊でしたが多分昔は鳥やネズミだったのでしょうか。この施設はどうもペンションらしく高級そうなコテージがいくつもありません。さて、ここを終わって

すぐ海岸に出ると我々の船が沖に停泊しているのが見えました。そしてお待ちせしました。モアイとの初対面です。モアイ像は文化遺跡なので近くに行けません。高さは約三メートルくらい。ふつうのモアイは目は描いてありませんが、後期のものはぼつちり目もあるとか。そして上の帽子状のものはどうも当時の髪型のようなです。そしてもつと驚いたことは十八世紀に発見された時には殆どの像が部族争いによって倒されていたらしいのです。そしてほとんどはそのまま放置されていたらしいのですがTV番組「世界ふしぎ発見」での黒柳徹子さんの発言がきっかけになり日本のクレーン会社タダノが全て起こしたのだとか。今もタダノの出張所みたいな所がありました。ということ。一日が終わわり、二回目には船内で原地のおっちゃん達の指導のもとミニ・モアイ作りにチャレンジしました。

ここで作るから意味があるので。殆どおっちゃんに作ってもらい立派に完成しました。日本へ持って帰って高く売れるかな。



今回は『今昔物語』の弟分の説話集『宇治拾遺物語』から取り上げましょう。この説話集も芥川龍之介が多くを種本として使用していることで有名です。名作も多いこの説話集、はじめて紹介するのが次の一編なのは気がひけますが…。教科書に出ない度は五／五。

中納言師時、法師の玉茎検知の事 宇治拾遺物語(巻一ノ六)

これも今は昔、中納言の師時しよときという方がおられた。そのお屋敷に、真つ黒な墨染めの衣の短いものに、袈裟をかけて、無患子むげんじの数珠ずしゆの大きなのを首から下げた流浪の法師が入ってきた。中納言「お宅さんは何をなされるお坊さんですか」と尋ねると、この法師、ことのほか哀れ気な声で「現世は仮の世ではかないもの。世界開闢かいびやく、この方、生命は輪廻するといふ真理に思いを致しますに、煩惱に引きとどめられ、このようにはかない憂き世から脱却することができずにいるのでござります。これでは益のないことと愚考し、煩惱を切り捨て、この程ひたすらに生と死との輪廻の境からの脱却を悟った聖せいでござります」といふ。

中納言「はて、煩惱を切り捨てるとは、どないなさるんどすか」と尋ねられると、「ほら、これを『覧めされい』と言つて、

衣の前を掻き上げて見せると、実にあるべき男性自身がなくて、ひげばかりがのぞいている。

「こりや不思議なこつちや」と、よく見てみるとだらりと下がった袋がやけに大きいようなので、「誰かおらんか」と人を呼ぶと、使っている侍が二三人出てきた。「その法師をお連れもうせ」と命令すると、この聖、真剣な顔をして念仏を唱え、「早う、お望みどおりになされい」と言つて、あわれ気な様子で、足を広げて横たわった。そこに中納言「足をもつて広げさせよ」とおっしゃると、二三人で足をもつて広げさせた。そこで十二三才くらいの小侍がいたのを呼んできて、「あの法師の股の上を、手を広げて上げろしさせ」と命令した。小侍は命令されるままに、ふつくらした手で、上げたり下ろしたりしてさする。しばらくするとこの聖、真剣な顔になって「もうこれ以上はおやめくだされ」と言うが、中納言は「ええ塩梅しほばになつてきよつた。もつとさすれ、さすれ」とけしかける。聖は「具合、悪いです。もうやめて」と言うのを、意地悪くさすらせていると、毛の中から松茸の大きなようなものがふらふらと出てきて、腹にぼたりぼたりと当たる。

中納言はじめそこに居合わせた者たちは、大声で笑った。この聖も手を打って、

実は、男性自身を下の袋にひねり入れて、米粒のノリで毛を付けて、さりげな

くわからないようにして、人を騙し、物ごいをしようとしたのだった。狂惑の法師であつたことだ。

《終わり》

《コメント》

『宇治拾遺物語』から最初に取り上げるのがこの話なのは、それなりに勇気がいりました。まさに奇想天外、馬鹿ばかりさも突き抜けた話です。「阿呆話」の最たるものではないでしょうか。言葉の大仰さとやっていることのアホらしさの、この落差！

こんな作り話を思いつくか？と考えてみると、ちよつとやそつとでは無理ではないでしょうか。実はこんなアホな法師が実際にいたのでは、と思わせます。この突き抜けた馬鹿ばかりさが、逆にリアリティを感じさせてしまうのです。下ネタもこのアツケラカンとしたおかしさ。また男性の象徴を「玉茎」とは、よくも表現したものだと思います。



B級サラリーマン渡世譚 (29)

明石 幸次郎

N川のM井さんへの反論で、M井さんの顔色が変わり、それを見た明石はM井さんから、次にどんな激しい言葉がN川に返ってくるのか、それにより、二人の関係が拗れるのではないかと心配した。その時、向いに座っていたT村さんが、三人の話を聞くともなく、聞いていたのか、絶妙のタイミングで「Mちゃん、大分、アンタの方が、分が悪そうやなあ」と笑いながらM井さんに話しかけて来た。次にN川の方に向つて「君も入社五年が経ち、しっかりと自分の意見を言うようになったなあ。エエ事やで！自分の考えを持ちながら、お互いに言いたいことを言い合うのは。それを、言い合つた後は、お互い相手に対して、腹に持たないことや。Mちゃん、N川も成長してきたし、今度、工場から明石君も入つて来たし。彼も中々、工場で苦労したみたいやし、自分の意見を持つていそうや。Mちゃんもこれからは、実務は二人に任せ、指導的立場で二人の仕事をサポートするようにしたら、エエやないか。N川に向きになつて議論することはないで。ハツハツハー」と八重歯を見せながら、M井さんに笑いながら話しかけた。M井さんは「Tちゃん、こいつら二人共、頑固な奴やで！自分の意見を曲げよれへん俺もしんどいわ」と応じたが「Mちゃん、頑固さでは、アンタの方が、この二人より数段上と違うか？まあ、そう言う俺も

頑固やけど、Mちゃんには負けるわ。処で、この部は部長始め、頑固で個性的な人間の集まりや。国内の営業の連中からしたら、輸出部の俺らは、野生の猿みたいなもんで、好き勝手にワイワイやっていると思われているんや」それに対しN川は「Tさん、猿ですか？ライオンか虎位に言われたいですね」「ホンマやなあ。俺も箕面に住んでるので、箕面の猿やと言われているんやろなあ」と笑いながらN川に応えた。T村さんの味のある話しぶりで雰囲気が変わり、N川も「我々が猿の集団としたら、そう言えば、M井さんには、マウンテングをされつぱなしですよ」とTさんに笑いながら付け加えた。

明石は、仕事の中にこんな会話をしながら、仕事をしてもなしに冗談を交わしながら、又、会話に加わらない周りの人は、黙々と仕事らしき事をやっている職場の雰囲気は何となく自分に合っているのではないかと、感じて来た。

T村さんの話しかけで、雰囲気緩和が和んで来たのを感じて、M井さんが「N川、工場に依頼して、最短納期と限界利益20%ぎりぎりの見積もりを貰つておけ。電話した後、別室で打ち合わせや。明石、お前は、俺が書いた引き継ぎ書を読んで、仕事の流れを理解しておけ。それと、U工場の工務課と物流管理課に電話で挨拶して、出荷がいつ頃になるかを掴んで、それを書面で貰つておけ。明日、M商事から韓国向けのCKDの話が出たら、お前が答えるように頼むぞ」と二人に指示をした。

明石は、M井さんから、お前が答えるようにと言われたが、何をどう答えたら良いか、予想がつかなかった。又、韓国に急遽、誰かが出張に行かねばならない状況らしいが、渡された引き継ぎ書を読んでも、その緊迫感が伝わって来なかった。兎に角、メーカーがやらなければならぬ最重要度の高い項目は何かを考えたい。それは、出荷納期、コスト、仕様が客先の要望に合致しているかで、今は納期が最大の課題になっていることは、A杉課長とM井さんとの会話で想像がつき、毎回、納期問題でトラぶっている様であった。

明石は工場にいた時の経験から、上司を頼らず、自分で関係者から直接事情を聞いて、問題になっている原因は何かを掴むように心掛けていた。

そこで、U工場の工務課のSさんに電話をして転勤の挨拶と韓国を担当することになったことを伝えた。自己紹介としてS工場の資材課にいたことを伝えて、改めて本論の出荷納期を聞いた。Sさんは「大枠は、輸出部の希望通りの十一月初旬出荷は行けると思うが、一部の部品が生産中止になっているので、新品番と兼用が可能かどうか、不可能であれば、旧品番を特別に生産して貰うとなると納期が掛かり、十一月の出荷は難しくなる。この情報は、既に早くからM井さんには全て伝えている」ということであった。明日、M商事に納期を聞かれたら、条件付きでしか答えられないと思ったので、近々、U工場に出向いて改めて、問題の

気持ちいいと感じる曲

とあるニュースによれば「人が気持ちいいと感じる曲トップ10」が「発見された」らしい。このニュースが面白いのは、人気投票の結果ではなく、科学的な根拠を添えている点である。調査はフロリダ大学（オランダ）のジェイク・ジョリジ博士によるもので、博士によれば、一分間に一五〇回ビートが打たれるハイテンポさ、長三度（メジャーサード）、ポジティブな歌詞が鍵になるのだそうだ。

科学的どうこうと仰々しく持ち上げるよりは、イグ・ノーベル賞的なネタとして笑っておきたい気もするが、「気持ちいい」という主観的な要素を、客観的なバロメータで示そうとしているところがミソである。もともと歌詞のポジティブさは数値化できない主観の領域なので、条件は一五〇ビートと長三度の二つだけになってしまふのだが。

ところで、この一五〇ビートと長三度とはどんな条件なのだろう。前者はドラムのビートが毎分一五〇回程度のテンポのことなのか、それとも一五〇回オーバーが条件ということなのかよく分からない。長三度に至っては音楽理論のイロハも知らない者にはイメージもできない。もとより楽器に触れることもないので、懇切丁寧に教えてもらったとしても頭には残らないだろう。

それはさておき、「気持ちいい曲」の栄えある一位に輝いたのは何かというと、

クイーンのドント・ストップ・ミー・ナウだとか。歌詞が基準に入っている時点で、歌詞のない曲と非欧米語圏の曲が除外されることになるが、笑い話にツッコミを入れるのも大人げない。それより、人を「気持ちよく」させるナンバーワンがドント・ストップ・ミー・ナウだと受け入れておいた方が話は進む。とはいえず、聴いてご機嫌になれる曲なのは確かだが、最初から除外された範囲が圧倒的に大きいから、「それで？」と反応するしかない。あるいはドント・ストップ・ミー・ナウが選ばれるのなら、あの曲は？、この曲は？といった形で代替品は無数に挙がってくる。おそらく、そこで一五〇ビートと長三度が意味を持つのだろう。ともあれ大学教授の研究ということで相応の体裁をとって発表されたに違いないし、肩書きのためか、もともとらしく聞こえてしまふのだろう。こちらから言い添えることは何もない。

ところでわが日本の歌謡曲も視野にいれると、どうだろう。一五〇ビートと長三度に合致するかどうかは知らないが、ハイテンポの楽曲で耳触りも落ち着くメロディというのなら、「青い山脈」は外せない。古すぎると侮るなかれ、藤山一郎のオリジナルだけでなく、吉永小百合版、美空ひばり版、森昌子版、館ひろし版など百花繚乱の様相をみせている。とあるTV番組ではAKBの女の子たちにも歌わせていたようなので（かなりの失笑モノだが）、世代を超えてカバーされ続けている名曲である。

先月末は、中秋なのに満月でないだのスーパームーンだのが続いたせいで、何かと空を見上げる機会が多かった。見るに値する天体ショーだったのは確かなのだが、翻って考えれば夜空を見上げて新鮮に思えるのは物質文明に害されたなれの果てなのかも知れない、という物々しい言い方だろうか。要は、身のまわりの自然現象が自然なものに感じられなくなっているということである。それをもって「害されたなれの果て」と言ってしまうのは言葉が過ぎるにしても、地球環境の中で生きる存在としての、本来の姿ではないとも言おうか。否、この言い方もやはり言い過ぎかも知れない。端々に微妙な価値観が入ってしまうので難しいところである。

詮じれば物質文明を享受しながら維持するために致し方ない部分と、地球環境の一部分として存在せねばならない部分とのさじ加減ということである。前者に偏りすぎると文明に毒されて本来の姿を失った云々といった非難を甘んじて受けねばならないし、かといって後者に身を委ねてしまうと、今度は教条的なイデオロギーに囚われた喚声に流された挙句、石器時代の洞穴生活に戻らざるを得なくなる(もちろん極論である)。ともあれ、じっくり月を眺めていると、月ってこん

なに大きかったのかとか、月って明るいものなんだと改めて感じてしまったのである。そして、そんな感覚が戻ってくると同時に、自然回帰の願望も頭をもたげてきたという話である。

さて月に関連してもう一くさり、というか、こちらが本題である。先月末の天体ショーを見ていて思い立ったのが「月を見る感覚のいまむかし」というテーマである。これは日本語の問題として、とある古典の有名な一文にも影を落としている。

(かぐや姫は 七月十五日の月に出、
あて、せちに物思へる気色なり。

主語をかぐや姫と補ったからには、文章の出どころが『竹取物語』であるの言うに及ばない。ごくごく短い一文ながら、なかなか奥が深い。『竹取物語』には、

この少し後に「八月十五日ばかりの月に出であて、かぐや姫、いといたく泣きたまふ」という文も出てくるが、それぞれの文の内容は「かぐや姫は、七月十五日の月夜、縁側に出て座り、深く物思いにふけている様子である」と「八月十五日ごろの月夜の晩、かぐや姫は縁側に出て座り、たいへんしみりと泣いていらつしやる」といったところだろう。普通に出版されている訳本でも概ねそんな内容になっているはずである。しかし文法的な解釈を厳密に施すなら、完璧に間違っている、といって差し障りがあるとす

れば、この二つは現代語訳にはなっていないと言わねばならない。

両方とも文の構造は同じなので「の月に」+「出であて」+(以下略)とまとめることにしよう。そうすると問題の所在が明確になる。先に挙げておいた訳文でターゲットになるのは「七月十五日の月夜、縁側に出て座り」と「八月十五日ごろの月夜の晩、かぐや姫は縁側に出て座り」の部分である。ここでいう「七月十五日の月夜」と「八月十五日ごろの月夜の晩」は助詞を用いずに動詞に係る副詞句である。それに対して原文は「の月に」+「出であて」といった形で、動詞「出であて」に格助詞「に」が係っている。ひらべったく現代語で内容を伝えるだけなら、ほぼ同じといってもいいのだが、厳密な立場をとるなら文の構造が違っている点は看過できない。

ここで現代語による内容説明は横に置いておき、原文の文構造だけを見ることにする。注目するのは、格助詞「に」が「七月十五日の月」や「八月十五日ばかりの月」を従えて修飾句となっている点である。これは、現代語での類例を探すとすれば「三月に転動する」とか「八時に帰宅する」などを同じパターンで挙げることができる。この例文では「三月に」と「八時に」はそれぞれ「転動する」と「帰宅する」に係る修飾句であり、ともに時間を示しているのは明らかだろう。だが、これらがなぜ時間を示す修飾句と

言えるのかと訊ねるとどうか。自明だからというのは回答として却下すれば、「に」が従えるところの「三月」および「八時」が時間を示す観念であるからといった説明にする必要がある。

さて、これを踏まえた上での『竹取物語』である。「三月に転動する」や「八時に帰宅する」を説明したのと同じ論法を適用すれば、「七月十五日の月に」と「八月十五日ばかりの月に」が「出であて」に係る修飾句であり、ともに時間を示しているということが出来る。さらに加えて、「七月十五日の月」と「八月十五日ばかりの月」が時間を示す観念であるところまで持つていくことができるはずである。三つ目の点で重要なのは何月何日とある日付の部分ではなく、「月」が時間を示す観念となっている点である。「七月十五日に」ではなく、「〇月×日の月に」と言うことよって時を示している点である。

相当に持つてまわった説明になったので、太陰暦の時代なんだから当たり前じゃんとした顔で笑う人が出てくるかも知れない。しかし、そうした嘲笑は月に関わるものが単独で時間表現になるケースは現代語には存在しないという事実と付きあわせてみるとどうだろう。件の一文は、文構造のレベルまで正確に対応させた現代語表現が作れないから「七月十五日の月夜、縁側に出て座り」というふうに「月夜」を補っている。「月」では

編集後記

今年が秋が早くきた感じがします。このままの陽気が続けば秋をながく楽しめます。

残念ながら自衛隊派遣法が参議院で可決されました。

可決後も、反対運動が盛り上がりつつ勢いを増しています。

大げさに言えば、日本の新しい民主主義の夜明け、始まりだと思います。自らの意志でデモや集会に参加して抗議の姿勢を示す。

これまでは、組織的な参加者がなされていたわけですが、今回の戦争法案反対運動は自発的な参加者です。

実際に参加してみると、デモや反対集会は、初めての人が大半でした。しかも、個人参加が多いです。

こんな事を許したらアカン。戦争をする国にしたらアカン。こんな思いが参加者から伝わってきました。

「憲法を守ろう。九条を守ろう」というと、左翼系だと非難する人がいますが、日本国民が日本国憲法を守れ、というのはあたりまえの事です。

守ろうとしない人がおかしいのです。国会議員は憲法を守る義務があります。好き勝手にしたいなら議員をやめてやれば…。

(憲)

日本国憲法

前文

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたって自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基づくものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めている国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免か

れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

第九条

一、日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

一、前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。



なく、「月夜」としておけば現代語でも時の観念として通用するからである。しかし、原文に対応させると、この操作はほぼ同じ内容の置き換えではあるが、訳の範囲を逸脱している。結局のところ、格助詞「に」の働きに注目して厳密な訳を作るとすれば、「七月十五日の月が出ていた時に縁側に出て座り〜」といったあたりだろう。

古文を読んでいると、月の形状に関する表現が豊富であることに気づく。「満月」や「三日月」など現代語に残っているものはもちろんのこと、他にも、たとえば「上弦」だの「宵待ち」だの、こと細かに言い分けている。これらは軒並み時間の観念と結びついており、現代人の生活感覚ではダイレクトには理解できない部分でもある。この先、何百年後のことになるか分からないが、もしも時間の観念が現代人のそれと異なる世の中がやってくるでしょうか。そうすると、その時代の人々には、現代人がカレンダーに記されている数字や時計の文字盤の数字をいう時の感覚は理解することが難しいものになるのではないだろうか。

戦争

戦争の記憶は忘れてしまいたい面が多い。でも世代交代を考えると、語りつがなければならぬ事が多すぎる。聞く耳もどこへやら。

安倍さんが、安保法案の成立を指して国のあり方を変えようとしている。何考えてるのや。大人も子どもも軍事訓練に励み勉強どころかたべるのも、着るものすべて無いにひとしい時代だった。

がん首ならべて論争している人達は戦争のじじめさを知らない人たちなんだと私は思う。

中でも深刻だったのが、お米である。百姓をしている人たちでさえ、公に白いご飯が食べられなかったのだ。誰が告げ口するのか。

あの家の蔵の中に米が隠してはる、と。警察がガチャガチャ尻の剣をならして、米を没収していく。没収した米をどうするのやる。警察で食べてるのか、とみんなの目が集中していた。

食べて生きてゆく、この基本すらメチャクチャ。人の心が荒れた時である。そして終戦。大本営発表、ラジオの声が聞こえる。ドキッとして仕事を止めて聞き入る。

ヤレヤレ終わった、とため息まじりに言う。もうこの年令になると、あの時は…、と話をする人さえ此の世

にいないのだから。

男の子、孫の顔を見ると

「戦争したらアカン、戦争への道は歩いたらアカン」と口すっぱく言うものだから、「おばあちゃん、また戦争のこと言う。戦争なんかセヘンて」と笑う。

この時期がくると、きらわれ者のバアさんである。

いつまで現役

この年になると

同じ年の誰それが

亡くなったとか聞く

でも聞けば何となく

順番が自分に

どうして、どうして

まだ、あれをしなくちゃと

現役を目指すんだ

高校野球を見て

真夏日、熱帯夜、極暑、熱中症。

どの言葉を聞いてもうだるような暑さ。

年々その暑さが身にこたえてくる。そんな中、今年で百年を迎えた全国高等学校野球選手権大会が行なわれ、熱戦が繰り広げられてきた。開会式での力がみなぎる入場行進、内容がとても評価された選手宣誓だった。

ユニホームを真っ黒にしながらい白球を追う汗と涙のドラマ。マウン

ドと応援団が一体となり真剣勝負は感動ものである。

ここにきて夏バテ気味の私は試合に挑む球児たちの一挙手一投足に胸をあつくしながら画面に見入る私。

十四人の家族の三男が球児として頑張る姿。それに兄弟妹両親が懸命に声援を送る一心同体の姿が今でも胸に残り、思わず何度も深呼吸をして、心からの声援を送った。

暑さとの対決も、あとひと頑張りだと思つて。

いつまでも元気で

安ベエと暮らし始めて十年、一緒に暮らし始めた年月の長さを思い、ちよつと若々しさがなくなってきたように思う。

安ベエの老いは私の老いでもあると実感する此の頃。でも私への甘えぶりは変わらない。

私ที่บ้านにいる限りは決して離れない。人の訪問があつて離そうものなら、訪問者が帰るまでほえまくる目が合うと何か言いたそうにする。たまらなく抱き上げて、ほほずりをする。入浴中は、ガラスドアに顔をつけるようにして鳴いて催促する。

私の生活は、安ベエを中心に回っているようなものだ。いつか近い将来、安ベエはこの世からいなく

なる。自分が先かと不安な気持ちに

かられる。話しかければ必ず、ワンと一声返事をしてくれる安ベエ。その声も、いつか聞けなくなるのだ。私は、それに耐えられるだろうか。私が、安ベエを見守つてきたのではなく、安ベエが私を見守つてくれているのかも。

「安ベエ、ありがとう。元気で長生きしてネ。幸せかい、元気かい」。私と問いに、出会つた頃と変わりのない声で、優しい顔で私を見つめワン・ワンと返事をしてくれた。

俳句

土田 裕

蛸やにはかに暮るる峽の宿

木道の続くかぎりの草紅葉

兄の名の一行増えし墓洗ふ

曼珠沙華あとかたもなく

花失せて

秋鯖や

味噌煮は妻の自慢にて